

# 交換日記



きたゆきこ



庭からの明るい夏の日差しが部屋に差し込む中、電源の点いていないテレビを真っ直ぐ見つめていると、玄関の方から物音が聞こえた。何かが郵便受けに投函された音だ。

その音に気が付いた<sup>せいり</sup>聖良は、視線をテレビ画面から玄関へ続く廊下へと移した。廊下の前には暖簾が掛かっており、聖良の視線はそこで遮られた。静かに風に揺れる暖簾を見つめながら、小さな耳を<sup>そばだ</sup>敬<sup>て</sup>て、ドアの外<sup>そ</sup>の気配を伺ったが、郵便受けに投函していった人物の気配を感じ取ることはできなかった。

聖良は<sup>おもむろ</sup>徐<sup>ろ</sup>に立ち上がり、軽やかな足取りで玄関へと向かった。裸足のまま土間に下り、高鳴る胸を抑えながら、郵便受けの中に手を差し入れた。郵便受けから出した手には1冊のノートが握られていた。A4サイズの大学ノートは新品の輝きを放っていた。

聖良はそれを両手で胸に抱え、小走りで先ほどの部屋まで戻った。

広い和室の真ん中には、大きな長方形の木製の机が置いてある。重厚なその机は、祖父が骨董屋で衝動買いした一品で、骨董屋の店主によれば、何百年も前に作られた、とても貴重なものだという事だった。

聖良はその机の前に正座を崩した格好で座り、胸に抱いたノートをそっと置いた。表紙には、「交換日記」と、達筆な筆文字で書かれている。

部屋の障子は開け放たれており、そこから庭を歩いて吹き込む初夏の爽やかな風が、聖良の長いお下げを僅かに揺らした。

聖良は愛おしそうにノートを撫でた。手を止めて、目を閉じると、浩太の顔が臉に浮かぶ。坊主頭に白いシャツ、黒い学生ズボンに真っ白なスニーカー。照れくさいのを隠すかのように、口を尖らせてわざと不機嫌そうな顔を作っているのが、聖良はおかしかった。

しばらく夏の風に身を任せ、頭の中に浮かんだ浩太の姿を眺めていたが、誰かが呼ぶ声が耳を<sup>かす</sup>掠めたような気がして、目を開いた。野うさぎのようにきよろきよると辺りを見回してみるが、聖良の他には、人間は見あたらない。

「・・・気のせいね。」

聖良は再びノートに目を落とし、ゆっくりと表紙を開いた。

最初のページは浩太が初めて書いてくれた日記だった。もう一年以上も前に書かれた浩太の文字を、聖良は愛おしそうに見つめた。交換日記をやろうと言い出したのは、浩太だった。唇をキュッと一文字に結び、背筋をピシッと伸ばした浩太の手にはこの交換日記が握られていた。頬がピンクに上気していたのを、今でも覚えている。

脳裏に浮かぶ浩太を見つめながらペラペラとページをめくり、一番新しい日付の日記に辿りついた。

「ここだわ。浩太さん、どんな風にお過ごしなのかしら・・・」

『六月十八日 月曜 晴れ』

今日はとても気持ちの良い風が吹いていますね。聖良さんはお元気でしょうか。僕はとても元気でやっております。

こちらに来て早一年が経とうとしていますが、未だにこちらの生活に慣れることはありません。飯も、どうやら僕の口には合わないようです。

聖良さんが作ってくれた御御御付おみおつけが、素晴らしく美味かったことを思い出します。

これを書いている間にも、早く聖良さんの元に帰りたくて、たまらない気持ちになります。

自分のことばかり書いてしまいました。申し訳ありません。

聖良さんは、元気しておりますか？そちらは全て無事でしょうか？

いつもいつも、聖良さんのことを気にかけております。こちらでは、自由にできる時間も限られておりますため、短文にて失礼致します。

どうか、お体には気をつけて。

それでは、また近いうちにお会いできるのを、楽しみにしております。

冴島浩太』

「御御御付・・・そうね、浩太さん、好きだものね。」

聖良が初めて浩太に御御御付を出したとき、一口食べて目を丸くしていたのを思い出した。そして、この世にこんな美味しいものがあったとは、と口いっぱい頬張りながら感動していた。そんな浩太を見て、聖良はお腹が痛くなるほど笑ったものだった。

読みながら、聖良の顔には笑顔が浮かんでいた。浩太の言葉をじっくりと噛みしめるように、ゆっくりと一枚ページ開き、きれいに削られた鉛筆を手にとった。

## 聖良より

---

『六月十八日 月曜 晴れ』

浩太さん、日記楽しく拝見致しました。

浩太さんの書いた文字を見ていると、まるで実物の浩太さんとお話をしているような気持ちになり、とても幸せな気持ちになりました。

私はとっても元気しております。その他のことも、全て、全く無事ですので、安心して下さいね。

浩太さんの声を聞けなくなって、もう一年も経つのですね。長いようで短いという、何とも不思議な気持ちしております。』

ここまで書いたところで、聖良はふと顔を上げた。また、どこからか聖良を呼ぶ声が聞こえたような気がしたのだ。よくよく耳を澄ますと、夏のそよ風が草木を揺らす音に、微かに少女の声が混じっているようだ。

庭から部屋の中をぐるりと見回したが、自分以外に誰もいるはずもなかった。テレビと重厚な机以外には聖良の背丈に満たない茶箆笥があるだけで、隠れるような場所もない。

「誰か、いるの？」

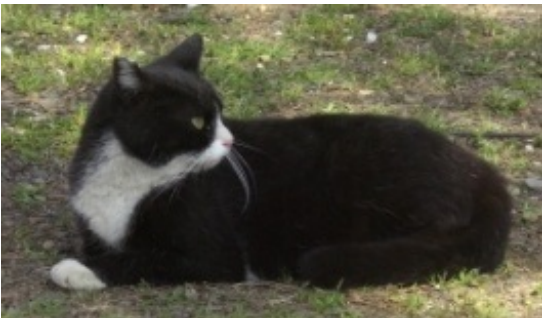
誰へとなく尋ねると、聖良のすぐとなりから、小さな鳴き声が答えた。驚いて目をやると、いつの間にか、猫がちよこんと座って聖良を見ていた。

「まあ。いつからそこにいたの？あの声も、もしかしてあなたかしら？」

聖良が優しく微笑み、猫の頭をゆっくりと撫でてやると、気持ち良さそうに目を閉じた。

「どこから来たの？猫ちゃん。」

もちろん猫が答えるわけもなく、ただただ気持ちよさそうに撫でられるに任せていた。しばらくその猫を撫でるために筆を止めていたが、すっかり伸びて寝転がっている猫の様子を見て、そっと手を離し、再び鉛筆を手にとった。



## 猫

---

『今、私の元に可愛らしい猫ちゃんがおります。浩太さんにも見せてあげたいわ。猫ちゃんの頭を撫でながら、何か名前を付けようかと思いましたが、浩太さんの顔が浮かびました。

何故かという、この猫ちゃんの白黒の模様が、まるで浩太さんのようだからです。

頭の黒い部分は浩太さんの坊主頭。体の白い部分は浩太さんの白いシャツ。足の黒い部分は浩太さんのズボンの色。そして、この猫ちゃんの足先だけが、真っ白なんです。まるで浩太さんのスニーカーのようでしょう？

思わず笑ってしまいました。笑ってしまいましたけど、それと同時にとても浩太さんに会いたくなくなりました。

会いたくて会いたくて、たまらない気持ちになったのです。

もうすぐお帰りになると分かっている、一分一秒でも早く過ぎてくれはしないかと、居ても立ってもいられません。

浩太さんがお帰りになる日まで、私はこの猫ちゃんとお待ちしております。

どうぞ、お体にはお気をつけてください。

無事お帰りになった際は、腕を奮って御御御付をお作りします。

では、また今度。

澤 聖良』

書き終わり、静かに鉛筆を置いて最初から読み直してみた。読み返し終わったところで、足元で伸びていた猫が一声鳴いた。その声に応えるようにノートから猫に目を移し、片手であごの下をくすぐってやると、猫はゴロゴロと喉を鳴らしてより大きくひっくり返った。

「あなた、どこから来たの？お家はあるの？」

そう尋ねると、ゴロゴロとひっくり返っていた猫が、寝転がったままずっと目を開いて聖良を見つめた。

「そう・・・あなた、お家がないのね。では、うちの子になる？」

ひっくり返っていた猫が起き上がり、聖良の膝の上に乗って座り込んだ。膝の上の猫を両手で抱きしめ、そのぬくもりを感じながら、聖良は小さい声で呟いた。

「私、一人なのよ。私と一緒に、浩太さんを待ってくれる？」

聖良に抱きしめられた猫は、問いに答えるかのように、また一声鳴いた。

猫を抱き、その温もりを全身で感じようとするように目を閉じていると、聖良は何か不思議な感覚を覚えた。違和感というべきなのか、何か言葉にできない、目の前にあるのに見ることはできない何かがあるような、不思議な感覚だった。

その時、ふと自分の周りに漂う匂いに気が付いた。顔を上げ、縁側の外に広がる庭へ目をやったが、当然、匂いの元になるようなものは見当たらない。

「何の匂いかしら・・・嗅いだことがあるような匂いだわ。これって・・・」

膝の上の猫に視線を落とすと、猫は膝の上で丸くなって、目を瞑っていた。

「ねえ、あなた、この匂い何か知っている？」

そう聞いてみたが、猫は何も答えることなくすやすやと寝息を立てている。その平和に満ちた寝顔を見ていると、自然と手が頭を撫でていた。そうしていると、段々と聖良の瞼が落ちてきて、ついには猫と一緒に眠りに落ちていった。

頭をテーブルに乗せた格好で、聖良は目を覚ました。頭を起こし、茶箆筒の上に乗っている時計付ラジオを見ると、一時半を指していた。どれくらい眠っていたんだろうかと思ったが、外の明るさがそれほど変わっていないことに気が付き、少し安堵した。

「あ、いけない。日記汚してしまったかしら。」

慌ててテーブルの上を見るが、先ほど書いたばかりの交換日記は忽然と姿を消していた。聖良は焦りながらも懸命に机の下や部屋中を探し回ったが、影も形も見当たらない。

元の位置にぺたんと座り込み、大きなため息と一つ吐いて、所在無げに電源の点いていないテレビを見つめながら、あのノートはいつ戻ってくるだろうかと思っていると、玄関の方から何かが落ちる、コトンという音が聖良の小さな耳に届いた。

その音を聞いたとたん、聖良の顔はパッと明るくなり、笑顔が零れた。

しかし、すぐには動かずに玄関の外に誰の気配もしないことを確認してから、立ち上がって玄関に向かった。

## 帰ってきた日記

---

裸足で玄関に下り、郵便ポストの中に手を差し入れると、まさしくノートが手に触れる感触があった。そっと手を出すと、手にはノートが握られていた。A4サイズの大学ノートは、長年使い古されたような格好だった。ノートの角や端は黒ずみ、折れ曲がっている。

「あら、随分と汚れてしまったのね。」

ノートに向かって話しかけながら、聖良はそれを両手で胸に抱え、小走りで先ほどの部屋まで戻った。先ほどと同じ位置に同じ格好で座り、机の上にそっとノートを置く。表紙には変わらない達筆な筆文字で、「交換日記」と書かれていた。

聖良は高鳴る胸を抑えながら、ゆっくりとノートを開いた。

『八月二日 木曜 雨

聖良さん、お元気でしょうか。こちらはとても暑いんです。それはもう気が狂いそうなほどの暑さです。そちらもとても暑いことでしょう。

体調を崩されたりはしてありませんでしょうか。心配しております。

ところで、この交換日記が、とても汚れてしまっていて、さぞ驚かれたことと思います。

あちらこちらに行かされて、その度にこの日記を肌身離さずに持ち歩いた結果なのです。

どうか、ご容赦ください。

聖良さんは覚えておりますでしょうか。以前、僕が帰ったら腕を奮って美味しい御御御付を作ってくださいと、約束していただきましたね。

その約束だけを心の支えに、日々を過ごしております。こうしてこの日記を書いているうちに、聖良さんの笑顔が臉に浮かびます。

聖良さん、あなたに会いたい。死ぬ前に、もう一度お会いしたい。一目でいい、この目で聖良さんを見て、この手に聖良さんを抱いて、僕の全てでああなたの全てを感じたいのです。

弱音を吐いてしまうことを、どうかお許してください。

また会える日を、心より楽しみにしております。

冴島浩太』

読み終わり、聖良は戸惑った。浩太の様子がいつもと違うことが、日記からひしひしと伝わってくるのだ。胸の中に急速に広がる不安という暗雲を何とか晴らしたいと思い、ついさっきまで膝で眠っていたはずの猫を探した。

## 猫の行方

---

しかし、部屋の中には気配すら感じなかった。立ち上がり、縁側から庭を見渡したが、やはりそこにも気配が無かった。浩太にそっくりなあの猫を、どうしてももう一度腕に抱きたいと思えば思うほど、焦りが募り、今にも泣き出しそうな顔になった。

その時、庭の草木や土によって冷やされた生暖かい夏の風に乗って、何か声のようなものが聞こえた。

「・・・猫ちゃん？」

聖良が耳を澄ますと、その声は隣の部屋から聞こえてくるようだった。縁側を伝って隣の部屋に入ると、そこはどこに何があるのかも分からないほどの真っ暗闇だった。何か異質な空気を感じたが、あの猫を腕に抱きたい一心で、思い切って部屋に一步踏み入った。

「猫ちゃん？そこに居るの？」

部屋の奥に向かって声を掛けると、今度ははっきりと猫の鳴き声が耳に届いた。

「よかった・・・！そこでじっとしていてね。今そちらに行くからね。」

暗闇の中で目を凝らしながら、ゆっくりと先を探るように進んだ。すると、二歩ほど歩いたところで、急に足元から猫の鳴き声が響いた。驚いて足元を見ると、あの白黒猫が聖良を見上げていた。

「あら。あなた、こんなに近くにいたのね。」

自然に浮かんだ笑顔でそう言うと、両手で優しく猫を抱き上げた。まるで腕の中に浩太がいるかのように、大事に抱きしめた。ふと真っ暗な部屋の奥から視線を感じ、そちらに目をやると同時に、先ほどと同じ聖良を呼ぶ声が、また微かに聞こえた。

「誰か、いるの？」

恐る恐る声を掛けるが、何の返事もなかった。相変わらず真っ暗で何も見えないが、視線だけははっきりと感じる。腕に猫を抱いたまま、足が無意識のうちに部屋の奥へと進んでいた。



## 少女

---

「・・・どなた？何かご用？」

何も返ってこない暗闇にもう一步足を進めようとした時、何かが足に引っかかった。転倒するまではいかなかったが、少し体勢を崩して前にのめった。それでも、猫を両手から放さなかった。体勢を立て直し、何に躓<sup>つまづ</sup>いたのかと足元を確認すると、布団の端が目に入った。

（この模様、どこかで見たような・・・）

布団の模様を目を取られていると、すぐ近くに何かがいる気配を感じ、弾かれたように顔を上げた。そこには、同じ年くらいの少女が立って、聖良を見ていた。不思議と聖良の頭には不審や恐怖は無く、ただただ黙って見つめ返していた。

（変わった格好の子・・・）

そう思っていると、少女が口を開いた。

「コウタ、こっちにおいで。」

少女が言うと、聖良の腕の中で大人しくしていた猫が、急にピョンと腕から飛び出した。

「あ、猫ちゃん！」

驚いて手を差し出して猫を捕まえようとしたが、その手もすり抜けて、「コウタ」と呼ばれた猫は、少女の腕の中に納まった。

「ねえ、お願いだから、その子を連れて行かないで。私と一緒に、浩太さんを待って。お願いだから・・・！」

少女に向かって懇願したが、少女は聖良の目の前から猫とともに消えていた。

「・・・猫ちゃん・・・」

聖良の目に薄っすらと涙が浮かんだ。もうあの猫は戻らないのだと察した聖良は、ゆっくりとした足取りで、再び縁側を伝って隣の部屋へ戻った。変わらず部屋の真ん中に鎮座する大きな机の上を見ると、交換日記が開いたまま置かれているのが目に入った。

「そうだね。お返事、書かないと。」

そう呟いて涙を拭い、小走りに机まで戻り、日記の前に座った。

## 浩太からの返事

---

『八月二十日 金曜 晴れ』

浩太さん、日記拝見致しました。

正直に感想を申し上げますと、とても不安な気持ちになってしまいました。

何か、とても大変なことが起こってしまうのではないかと、不安で不安でたまらなくなってしまったのです。』

そこまで書いたところで、ふいに聖良の手が止まり、続きを書く代わりにゆっくりとページをめくっていた。

「何か、書いてある・・・？」

空白が続くと思っていた先のページに、見慣れた字が並んでいる。几帳面さと優しさが滲むその文字を、聖良は驚きよりも嬉しさと愛しさをもって見つめた。

「浩太さん、もうお返事をくださったのね。」

聖良は嬉しそうに目を細めて呟いた。

『八月二十日 金曜 晴れ』

聖良さん、大変お久しぶりです。

もうすぐお会いできるかと思うと、とても胸が高鳴ります。

あれから幾年月が流れたのでしょうか。僕は、ずっとあなたが作る御御御付を待っておりました。

すっかりお腹を空かせて待っていたのですよ。

聖良さん、聖良さんが過ごされたこれまでの時間がとても幸せであったこと、とても嬉しく思います。大きなお怪我や病気もなかったことにも、すっかり安心しております。

僕は、聖良さんと出会えた自分の人生を、とても愛おしく、とても大切に思っておりました。聖良さんもそうであって欲しいと、僣越ながら願っておりました。

そのお返事は、お会いする時に、是非直接教えてくださいね。

聖良さん、僕と出会ってくれて、僕を見てくれて、本当にありがとう。

僕はあなたを、ずっとずっと、心から、心から愛しております。

冴島浩太』

## 再びの猫

---

「浩太さん・・・」

聖良の目から、大粒の涙が次から次へと溢れ出て、ノートに大きな染みをいくつも作った。細い指で、浩太が書いた文字を何度も何度も撫でた。どれくらい経ったのか、ふと気がつくと、縁側の外はオレンジ色に染まっていた。

「あ、猫ちゃん・・・」

オレンジの光を背にし、ちょこんと縁側に座るのは、先ほどどこかへ連れて行かれてしまったはずの、あの白黒猫だった。

「ああ、あなた、お迎えに来てくれたのね。ありがとう。私も、もう、行かなくてはいけないわね・・・」

聖良はそう呟いて、そっと日記を閉じた。すっと立ち上がり、真っ直ぐ隣の部屋へ向かうその足取りには、迷いも戸惑いも見られなかった。先ほどは真っ暗だった部屋の中は、縁側の外からの光を浴びて、綺麗なオレンジ色に染まっていた。

部屋の真ん中には、先ほど聖良が躓いた布団が敷いてある。

聖良は、その布団に近づき、そのまま布団の中に潜り込んだ。そして、ゆっくりと目を閉じた。

「おばあちゃん・・・？聖良おばあちゃん？」

再び開いた聖良の目には、猫を連れて行った少女が映っていた。

「お母さん！おかあさーん！おばあちゃん、目を覚ましたよ！」

大声で叫びながら、少女は部屋を出て行った。ふと枕元に目をやると、白黒のあの猫がちょこんと座っていた。

## 聖良おばあちゃん

---

「浩太・・・さん。」

「おばあちゃん、コウタが分かるの？」

いつの間にか、先ほどの少女が年配の女性を連れて布団の傍に戻ってきていた。

「あなた・・・このお家の子だったのね・・・私のお家に、迷ったのね・・・」

少女は不思議そうな顔をして、まじまじと聖良を見つめている。

「おばあちゃん、何言ってるの？ここはおばあちゃんの家だよ。」

しかし、その声は聖良の耳には入らなかった。また枕元の猫に目をやり、聖良は眩しそうに目を細めた。口には優しい笑みが浮かんでいる。

「本当に、お前は浩太さんにそっくり・・・」

「そうだよ。おばあちゃんが「浩太さんに似てる」って言って、この子に「コウタ」って名前付けたんだよ。覚えてる？」

少女が猫を抱き上げ、聖良の顔のすぐ近くまで寄せてくれた。布団から弱弱しく差し出した手は皺くちやで染みが目立つ、長年の苦勞がにじみ出ている手だった。その手で猫のあごをくすぐっていると、猫はおもむろに少女の手をすり抜けて聖良の顔の前で座り込み、聖良の頬に顔を寄せた。そして、ちらっと舌を出して、聖良の頬を伝っていた涙を舐め取った。

「お母さん、もしかして、お父さんの夢見てたの？」

年配の女性の目にも、薄っすらと涙が溜まっていた。

その時、聖良の鼻に先ほど嗅いだあの匂いが漂った。その匂いの元を辿るように目をやると、縁側で続いている隣の部屋からのようだった。

## 再会

---

「ああ、お父さんのお線香よ。お母さんが入院してる間も、毎日欠かさず、ちゃんとあげてたから、安心してね。」

聖良の視線に気付いた年配の女性がそう言って、柔らかく笑った。

「今、お夕飯の支度してるから、お母さん、ちょっと待っててね。マリ、手伝って頂戴。」

「え～私ここにいる！」

「お願いよ、手伝って頂戴。お夕食の準備、私一人だけじゃ大変だわ。」

立ち上がりながら年配の女性がマリと呼ばれた少女を促した。

「はあ～い。おばあちゃん、また後でね。」

マリは明るく言うと、しゅしゅといった感じで立ち上がり、年配の女性の後に付いていった。一人になった聖良は、暫く猫を見つめていたが、疲れを感じて天井に視線を移した。その小さい耳に、どこかから流れてくるテレビの音が微かに聞こえてきた。

「今日、2010年8月20日金曜日のお天気はどうだったでしょうか。お天気キャスターの喜多さ～ん・・・」

聖良は天井を見つめながら、呟いた。

「あら、私、もう65年も待っていたのね、浩太さん。」

「そうだよ。長い間、待たせてしまっでごめんね。」

枕元の、先ほどまで猫が座っていたところに、別れた時と何も変わらない優しい笑顔の浩太が座っていた。

その姿は、聖良に少女の頃の笑顔をもたらした。

「浩太さん・・・あの子見ましたか？とても可愛くて、とても優しい子なんです。身寄りを亡くして、焼け野原で泣いていたんです。私、あの子のお母さんになったのよ。あの子ね、浩太さんの写真を見て「お父さん」って言うんですのよ。浩太さんがお父さんで、私がお母さん。そんなあの子も子供を産んで、私、おばあちゃんになりましたの。私、夢が叶いましたのよ。浩太さんと家族になるという、子供の頃からの夢が・・・」

「うん。みんな知っているよ。聖良と浩子ひろことマリのことは、僕は何でも知っているよ。ずっと、ずっと見守ってきたからね・・・一緒にいることができなくなってからも、僕はずっと、君たちの側にいた。」

聖良の目に、再び涙が溢れた。

「浩太さん。あなた・・・ありがとうございます。ずっとずっと、お会いしたかった・・・もう一度お会いしたいと、ずっと願っておりました・・・」

聖良の頬を伝う涙をそっと拭った浩太の手は、そのまま優しく頭を撫でた。浩太の目にもまた、うっすらと涙が浮かんでいる。

「聖良さん、僕もです。とても、とても会いたかった。これからは、ずっと一緒に居られるよ。何にも引き裂かれることは無いのですよ。もう、戦争にも何にも・・・聖良さん、愛しています。子供の頃から、ずっと愛していました。」

そう言って、聖良の大好きな笑顔を見せ、浩太はそっと聖良の手を取って立ち上がらせた。立ち上がった聖良は、愛する浩太の手のぬくもりを確かめるように強く握り、そのまま浩太の腕の中に体を預けた。

「私も、浩太さんを、心の底から愛しています。私、とてもとても、幸せでした。本当に、ありがとう、浩太さん・・・」

ゆっくりと閉じられていく聖良の目は、とめどなく溢れる涙で濡れていた。

## 浩太おじいちゃん

---

「ねえ、お母さん、おじいちゃんってどんな人だったの？」

慣れない手つきで大根の皮を剥きながら、マリは並んで鍋をかき混ぜる母親に聞いた。

「私も会ったことが無いのよ。養女だったからね。」

「あ、そっか・・・」

「でも、お母さんはお父さんの話をよくしてくれたわ。写真を見せてくれてね、たくさん話をしてくれた。二人は幼馴染でね、とっても愛し合っていたのよ。」

何とか皮を剥き終わった大根をまな板の上に置き、一息ついたマリは浩子の方に体を向けた。

「そのおじいちゃんって、若いときに死んじゃったんだよね・・・？」

浩子は、鍋をかき回していた手を止めて、悲しそうな顔で答えた。

「戦争に駆り出されてね、そのまま帰ってこなかったの・・・お母さん、一人ですっと、この家で待っていたのに・・・亡くなったと分かって、それでもずうっと、待っていたの。」

「ふうん。一人で・・・」

「そう、一人でね。」

「寂しくなかったのかなあ。こんな広い家で、たった一人で待ち続けたなんて・・・」

「いつか言ってたわ。おじいちゃんとの思い出が残る場所が、もうこの家しかなくなってしまった今、どんなに人に囲まれるよりも一人でこの家にいる方がずっといいのって。まあ、同居して私に迷惑がかかると思っているのかもしれないけど・・・あなたを産んだの、随分年がたってからのことだったしね。気を遣ってくれたのかもしれないわね。」

「そっか・・・でも、おじいちゃんに一度でいいから会ってみたかったな。」

「私もよ。」

そう言って顔を見合わせた親子の顔には、浩太と聖良ゆずりの優しい笑顔があった。

## 聖良の御御御付

---

「あら？何かしら、これ・・・」

台所をマ리에任せて夕食の準備のために聖良が寝ている部屋の隣の和室へきた浩子の目が、見慣れない古びたノートに留まった。部屋の真ん中に鎮座する、大きく立派な机の上に、几帳面にきちんと置かれたそのノートには、達筆な筆文字で「交換日記」と書かれていた。何気なくパラパラと中をめくってみて、浩子は胸が高鳴った。

「これ・・・お父さんとお母さんのだわ・・・」

目頭が熱くなるのを感じながらゆっくりとページをめくっていったが、8月2日の日付以降、白紙になっていた。浩子は父母の互いに対する愛情の深さを改めて感じ、また目に涙が溜まってきた。白紙のページをさらにめくってみると、何故かそこには、ついたばかりのような涙の跡と思われる染みが、いくつか付いていた。不思議と、浩子にはそれが母の涙であると確信できた。

「お母さん・・・夢の中で、これを見ていたのね？」

この日記を見せれば、母が元気になるかもしれない。そう思った浩子が、急いで隣の部屋に持って行こうと立ち上がった時、美味しそうな匂いが鼻をくすぐった。ノートが乗っていた机の上を見たが、やはり何も乗っていない。きょろきょろと辺りを見回すと、仏壇にお椀が一つ、置いてあるのが目に留まった。

「これ・・・」

浩子には、それが何なのかすぐに分かった。母がよく作ってくれた、得意料理だったのだ。

「お母さんの御御御付・・・お父さんが大好きだったって、言ってたわね・・・」

仏壇の中のモノクロの写真の中で微笑む父の顔を見て、浩子の顔がほころんだ。

「お父さん、美味しい？良かったね・・・やっと、やっと会えたのね・・・」

浩子は溢れる涙を拭い、日記を仏壇に収めた。そして、父に再会できた母に娘と一緒に別れを告げるため、マ리를呼びに台所へと急いだのだった。



## 交換日記

<http://p.booklog.jp/book/52591>

著者 : kita-yukiko-0727

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kita-yukiko-0727/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52591>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52591>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ